日造協県支部（藤木園緑化土木）

佐藤 正幸 支部長

自然との共生を語る佐藤氏

プロフィル　さとう・まさゆき　1968年、習志野市生まれ。93年に藤木園緑化土木株式会社（習志野市）に入社、2017年から代表取締役を務める。
趣味は、釣り、トレッキングなどのアウトドアでの活動。幼少期にファーブル昆虫記に心を打たれ昆虫採集もする。また、高校時代のサッカー部の経験からサッカー観戦など。
好きな言葉は「実践躬行」（じっせんきゅうこう）。失敗を恐れることなく、何事も自らの力で実行する。

# 「生命の尊さ」伝えたい

## 若手技術者にエール

「建設業の中で唯一、生き物を相手にする仕事だ。生命の尊さを知ることは若い担い手にとって、人生の大きな糧になる」――。こう語るのは、日本造園建設業協会（日造協）県支部の新支部長に選出された佐藤正幸氏（藤木園緑化土木・代表取締役）だ。造園業界のDX化、技術の継承、担い手育成に全力を尽くす。県造園緑化協会の理事も務める佐藤氏に、造園業界の課題と魅力、担い手育成、生物多様性などについて話を聞いた。

◇

「造園業は、生き物を扱う。この特性を生かして環境負荷の低減、緑化、持続可能な素材や工法など、自然が持っている機能や仕組みを社会資本に活用するグリーンインフラを進める」と、生物多様性を踏まえて佐藤氏は強調する。

造園業界は、今後の社会経済を支え、人が健康的に働き、住まい、楽しめる生活基盤を造る担い手として、自然と共生する社会形成への貢献が求められている。デジタル技術の活用によるDX、脱炭素化、生物多様性確保など、社会経済に関する持続可能性を目指した動きが加速している。

「造園と聞くと、泥くさいイメージを持つ人もいるかもしれないが、CADやドローン、3Dモデリングなど、デジタル技術の導入と活用が今後ますます増えていくだろう」と続けた。

佐藤氏は、業界が抱える課題の一つに、やはり技術者の高齢化を挙げた。「高齢化社会を迎え、次世代に技術と技能を引き継げる労働環境を整備する必要性を強く感じている。若い人の入職が欠かせない」と、若手の採用と育成に力を入れる。

高卒者の採用を増やす目的で、今年も7月に造園課程がある高等学校との情報交換会を開いた。「去年の採用は目標に届かず、その上、離職率も高い。離職の理由はいろいろあるが、造園の仕事内容を理解していなかったことや給料・休暇の面でミスマッチがあった」と指摘する。

「賃金の引き上げだけでなく、休暇、現場の安全、ドローン・剪定ロボットなどの最新機器の活用、高所作業教育など、迎え入れる企業の環境整備は不可欠だ」と述べ、「高校生の抱える問題や若者の動向を注視して、彼らが何を求めているかを敏感にキャッチしながら職場環境を整えたい」とした。

また、造園業界の魅力や将来性を伝えるために高校に出向いて出前授業を行い、直接生徒たちと触れ合う機会を設けることも重要だと話す。

高校教諭との情報交換で、「最近の高校生は、社会人として必要な礼儀、マナー、コミュニケーション能力が不足している」との意見で一致したという。そのためにも、「出前授業で、たくさんの人の経験や生き方に触れ、将来について考える機会を提供したい。社会人として、守るべき規律、日本の文化をしっかりと身に付けることで、仕事の楽しさ、やりがいが生まれる。学校だけではなく、社会全体でこれからの日本を背負う若い人を育てていく必要がある」。

松戸市にゴーヤを贈る佐藤支部長㊨

地域への貢献も造園業を皆に知ってもらう機会の一つだ。藤木園緑化土木が指定管理者を務める船橋市の県立行田公園で、今年も10月5日に「行田フェスタ2024」を開催するという。

「ごみを集め、公園をきれいにするとともに、植樹体験やグラウンドゴルフ教室、フリーマーケットも開かれるので、是非、造園の仕事や取り組みを体験してほしい」と、広く参加を呼び掛けた。

また、日造協県支部は、会員が育てたゴーヤの苗を松戸市などの小中学校に寄贈している。ゴーヤの緑のカーテンで夏を涼しく、快適に過ごしてもらおうとの思いだ。

「緑のカーテンは、夏の日差しをやわらげ、二酸化炭素を削減する。実ったゴーヤを食べることで、食育にもつながっている」と、猛暑対策や環境教育の教材として学校側からも好評だという。造園技術を活かしたみどりのまちづくりにも意気込みを示した。

最後に佐藤氏は、「公園でカブトムシやスズメバチ、外来種のカミキリムシと出会う。カーボンニュートラルや生物多様性についても考える。こんなワクワクする仕事がほかにあるだろうか。$CO_2$削減に貢献し、産官学で連携しながら、しっかりとその存在を発揮していく」と笑顔を見せながら語った。